みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

現代移民の多様性：「Where is Home ?」から「Home Everywhere」へ：漂泊する華僑・華人たちのネットワーク

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 陳, 天璽
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001166

庄司博史編『移民とともに変わる地域と国家』
国立民族学博物館調査報告　83：29−39（2009）

「Where is Home ?」から「Home Everywhere」へ
—漂泊する華僑・華人たちのネットワーク—

陳　　天璽

1. はじめに

「Where is Home ?　何処是吾家（hechushiwujia）」，日本語に直訳すると「家はどこか？」。10 年ほど前，アメリカ・ニューヨークのマンハッタンにあるチャイナタウンで調査をしていたとき，町のはずれにある小さな華僑・華人博物館を訪れた。その入り口の壁一面には世界地図がはられており，大きく英語と中国語で「Where is Home ?　何処是吾家」と書かれていた。この展示の問いかけを目にしたとき，私は不思議に思った。なぜなら，1997 年より 2000 年までアメリカにおいて華僑・華人の調査をして，私が得ていた印象は，日本の華僑・華人と比較すると，アメリカの華僑・華人はすっかり居住国であるアメリカに根付いているようにみえたからだ。多くの中国系移民たちはアメリカ国籍を取得し，中国系アメリカ人として市民権を得ている。2 世 3 世は中国語よりも英語を第 1 言語とし，日常生活において差別で悩んでいる様子もなく，のびのびしている。そんな印象を得ていた私からすると，ニューヨークの華僑・華人博物館の展示に掲げられた問いかけは正直意外であった。

「Where is Home ?　何処是吾家」という問いかけは，華僑・華人たちが，心の拠り所を探し求めていることを象徴していた。つまり，中国語でいう「尋根（xungen）（「自分探し」「ルーツ探し」）である。

かつて，戴国煇が華僑・華人を論じる際に，「落葉帰根（luoyeguigen）から落地生根（luodishenggen）へ」とあらわしたことはよく知られている（戴 1980; 1991）。中国国籍を有する華僑は，海外に移住してもいずれはルーツのある故郷に帰る（「落葉帰根」）と考えられていた。しかし，戴は，華僑はいずれ居住地の国籍を取得し「華人」となり，移住先の環境に適応してゆく。そしてアイデンティティも中国に対する一元的なものではなく移住先の文化に融合・同化するであろうと「落地生根」を唱えた。これは多くの華僑・華人研究者そして華僑・華人たちに受け入れられてきた。

事実，現在中国系移民の多くは，移住先の国籍を取得し「華人」となり，その地に根を生やしている。筆者が調査してきたアメリカやマレーシアなどの中国系移民もしかりである。しかし，近年の華僑・華人たちの動きを観察していると，彼らの移住のダイナミズムは，「落葉帰根から落地生根へ」という単線的なものでは，もはやその真相をあらわすことができなくなっているように思う。また，「落地生根」したかに見える華人 2 世 3 世たちが，「Where is Home ?　何処是吾家」と問いかけていることや，

グローバル化に伴って華僑・華人がトランスナショナルな活動を活発化させていることなどから，より新しい視点が必要になっている。

筆者は，現在の華僑・華人の越境の実態を，「漂泊尋根(piaobuoxungen)から処々扎根(chuchuzhagen)へ」と表現することによって，より真相に迫ることができるのではないかと考える。「漂泊尋根」とは，華僑・華人がディアスポラを経験し，複数の国家や文化の影響を受けアイデンティティが曖昧であることからルーツ探しをしたり，また多文化を身につけているため越境をする機会が多いなか，自分の居場所を探し求める姿を表している。そして，「処々扎根」とは，以上のような特徴をもつ華僑・華人たちが，移動を続けるなか各地に分散した家族や知人とつながりが形成され，そのつながりからネットワーク型の生活形態やビジネス形態を形成するようになっていき，最終的には，1つの強靭不抜なルーツを見つけるというよりも，国境を越えた複数の基盤をもとに生きていくことを表している。

「落葉帰根から落地生根へ」と華僑・華人を表した比喩と比較するならば，「漂泊尋根から処々扎根へ」は，落葉が落ち着くところを探すかのようにあちこち浮遊していたのが，しまいには，着地したその先々で根を生やすというイメージである。前者は，故郷に帰るか，もしくは，現地に根を生やすかというように，目的地が明確であるのに対し，筆者が提起する後者は，拠り所とする目的地は明確ではなく，むしろ，いくつか縁のある地を行き来ししているうちに，各地に居場所を見つけ出すというものである。そんな自分探しをする漂泊の旅路は，ディアスポラを経験した移民の宿命でもあるように思われる。そして彼らは，結局，1つのルーツにこだわるというよりも，むしろ，多文化を内包している自己の特徴に気付き，それを生かした生き方が一番自分らしく，またそれが自然なあり方であると気付かされる。

本論では，華僑・華人たちが漂泊しながら自分探しをすることを通し，その越境の旅や経験から人的ネットワークを築き，トランスナショナルな活動を展開している実態を，インタビューや参与観察によって収集した具体的なケースから，明らかにする。なお，主な研究対象は2世3世にあたる華僑・華人である。

2. ディアスポラ論と華僑・華人研究

ディアスポラ（diaspora）という語は，研究社新英和辞典によると，「離散ユダヤ人」や「ユダヤ人のパレスチナからの離散」と解釈されている。他の辞典でもディアスポラは「散らされた者」や「離散して故郷パレスチナ以外の地に住むユダヤ人。また，その共同体」と記されている。以上からもわかるように，ディアスポラという言葉はこれまで，しばしばユダヤ人の分散を表す際に使われてきた。グローバル化にともなって人口の移動がより頻繁な近年は，ユダヤ人のみではなく，「フィリピン・ディ

アスポラ」や「ブラック・ディアスポラ」など，ほかの民族が移住し各地に点在している状態を表す際にも使われるようになってきている。

ディアスポラの語源をたどると，これはギリシャ語の「広める，蒔く，散らす」という動詞 speiro と前置詞 dia（over）から形成されている。人に用いる場合，移民や植民地化という意味を表す。

ユダヤ人やアフリカ人，パレスチナ人，アルメニア人などにとって，ディアスポラは不吉で残忍な意味合いを持ったものである。それは，追放されて故郷や祖国の外で生活をし，帰りたいところに帰れないという精神的外傷を共有している集団を指している。これに対し，近年は，国外追放や迫害を受けていなくとも，海外に移住し長い年月を経ても，比較的強い集団的アイデンティティを継続的に保持している分散した民族集団をディアスポラと呼ぶようになっている。こうした用法には，悲哀や感傷的な意味合いは含まれていない。

中国の国外に住む中国系移民は華僑・華人と呼ばれる。華僑は海外に居住する中国系移民で，依然として中国国籍を保持している人を指し，華人は居住国国籍を取得した中国系の人を指している。華僑・華人は世界各地に移住しており，その数は 3,000–4,000 万人に上る[1)]。こうした世界各地に散らばった華僑・華人にも，ディアスポラという用語が使われるようになっている。しかし，ディアスポラの語源の関係もあり，賛否さまざまな意見があげられている。

1998 年末，ハーバード大学で行われた「チャイニーズ・ディアスポラ」と題するシンポジウムでも，華僑・華人をディアスポラと表すことについて，激しく議論が交わされた。反対派の意見としては，離散したユダヤ人を指すことに起源を有するこの言葉は，聖書に出てくるように，迫害され聖なる地から追い出された民族を指しており，悲哀のイメージが強い。また，それは一元的な点から民族が離れて散らばることを意味するので，華僑・華人には不適切だというものであった。

その理由として，第 1 に，華僑・華人の海外への移住は，必ずしも追放ではなく，多くの場合は，より良い生活を求めて自ら移住することを選択している。つまり，華僑・華人の移住は受動的ではなく能動的なものであるという点が上げられる。

第 2 に，ディアスポラは「離散（risan）」と訳されているが，華僑・華人の場合，分散するという遠心力だけではなく，共通のアイデンティティによって繋がるという求心力をも持っている。そのため，訳語は「離散（risan）」ではなく「聚散（jusan）」などのように，集まる意味合いを含めて表現されるべきではないかという意見である。また，華僑・華人は移住元と移住先を往復したり，第三国などへの移動を続け，最終目的地がないまま移住を続ける傾向もある。そのため，「漂泊（piaobuo）」とあらわすのが適切であるという意見もあった。

一方，賛成派の意見としては，用語の起源が華僑・華人の移住に適していないのは

理解するが，世界各地に拡散した移民の現象とそのネットワークをディアスポラを用いて分析するという視点は，華僑・華人研究にとっても重要であるというものであった[2)]。各居住国のケーススタディーというものにとどまらず，比較研究やよりマクロな視点での研究が可能となり，華僑・華人研究の発展にも繋がるという意見もあった。

華僑・華人の移民史に精通している王賡武（Wang guangwu）は，ユダヤ人に使用されたディアスポラという用語を華僑・華人にあてはめることに賛成していない。しかし，彼はディアスポリック（diasporic）な視点，つまり，民族が散在している現象や状態を研究する視点で華僑・華人を捉えることは，時代の趨勢からも大変重要であると考えている。

筆者はディアスポラの用語を華僑・華人に使うことは重要な試みであると考えている。その際，ユダヤ人を指した悲哀なイメージ，つまり「情念」とは切り離し，華僑・華人が点在している「現象」や「状態」を指し，華僑・華人が故郷の内乱，より良い生活を求めるためなどの理由で，さまざまな地域に押しだされ分散するというプッシュ（push）の力学とともに，共通するアイデンティティによって求心力を有するプル（pull）の力学をあわせもっていると認識している。

経済のグローバル化の進展において，ディアスポラは一定の影響力を有している。また経済だけではなく，現代社会を考える上でも，大切な視点であると思われる。トインビー（Arnold Toynbee）は，将来の潮流として，局地的な国民国家よりはむしろ，世界に拡がったディアスポラが重要になるであろうと主張し，早い頃から彼の著書においてディアスポラの重要性を予期した（Toynbee 1961）。20 世紀が国家を主体とした歴史であっただけに，われわれは国家の枠組みで物事を見ることに慣れ親しんできた。世界システムにおける国家の枠組みの重要性を否定するつもりはないが，それとは異なったレベルや視点で世界を認識することも重要である。その際，ディアスポラは国家の前提であった地理的な要因を超えて，世界に散在した民族が類似した歴史的経験の共有によってつながりを形成するという，空間的により柔軟でダイナミックな存在であり，グローバル化している現代社会と今後の歴史的趨勢を捉える上でも大切な視点であると思われる。ディアスポラという形で世界に広がった民族が，その民族的な同質性や共感をもとにネットワークを形成し，経済的活動をはじめ，文化的，政治的活動を行うことによって，国家に対し影響力を及ぼしうる存在となる可能性は大いにある。

3. ディアスポリックな家族

頻繁な越境により華僑・華人の家族形態もディアスポリックになっている。代表的な例では，香港返還が実施される 1997 年を前に華僑・華人が香港から移住したことがあげられる。彼らは返還後の生活がいかなるものになるのかが予測不可能なため，

家族の将来やリスク回避を考慮して，アメリカやカナダ，オーストラリアなど移民の受入に比較的寛容な国を目指した。特に，バンクーバーは，1980 年代より，香港からの移民が一気に増加し，「ホンクーバー（Hong Kong と Vancouver，それぞれの語頭と語尾をつなげて）」と揶られるほどであった。

家族や将来の安全を考え，バンクーバーへ移住した華僑・華人のなかには，カナダで新しいビジネスを築くことに成功したものもいる。しかし，それはむしろ稀で，やはり，香港やアジアでのビジネスの貯蓄や収益を，カナダの生活や新しいビジネスの資金源としているものが多かった。そのため，家族はカナダで生活をし，稼ぎ頭（しばしば夫）は仕事のためにアジアに戻る必要があり，家族は離れて暮らすことになる。こうした家族は，移住先とビジネスの拠点であるアジアを頻繁に移動することが多く，「太空人（taikongren）」と比喩されていた（陳 1999）。

「太空（taikong）」とは，中国語で宇宙を意味する。飛行機で空の上を頻繁に行き来しているディアスポリックな家族は，宇宙飛行士のように，国境を意識しない感覚を持っているという意味が込められている。また，こうした華僑・華人の家族を「太空」と表す際，そこにこめられているもう 1 つの意味も見逃せない。家族の生活や将来のため，頻繁に越境しているが，家族が離れて生活することが長期化することによって，皮肉なことに，家族崩壊が発生しているのも事実である。こうした家族を「太空」と表すのは，世界を飛び回るという意味で「宇宙飛行士」に揶られているほか，夫が常に家を留守にするため家が空っぽで，妻（中国語では妻を太太（taitai）という）の心が空虚，つまり「太空」な状態だという隠喩もこめられている。

3.1. 家族 5 人 4 カ国 5 箇所に帰る

在日華人 2 世の黄さん一家[3] は，ディアスポリックな家族の 1 ケースである。台湾に生まれた黄さんは，幼少期に両親の移住にともなって来日し，横浜中華街で育った。小学校，中学校の教育は横浜にある華僑学校で受けた。日本の高等学校を卒業後，台湾の大学に進学した。台湾生まれの黄さんにとって，台湾での大学生活は故郷に戻ったような懐かしい思いをともなうものであった。なぜなら，彼女はそれまで日本において常に外国人であるという意識があったからである。しかし台湾に戻った後，彼女の日本との関係が生まれ故郷である台湾に劣らないものであることが明らかとなる。大学において，彼女は多くの人間関係があるなか，日本からの留学生である小川さん（仮名）と知り合い交際することになるのだ。黄さんにとって，台湾は日本よりも安心するところであったはずだが，そんな台湾に戻って，彼女がもっとも打ち解けられた相手は，日本に関する共通の話題を豊富に持つ小川さんだったのである。2 人は 8 年の交際を経て結婚することとなった。

小川さんと黄さんは，結婚当初日本で家庭を築き 3 人の子どもを授かった。小川さ

んは台湾に留学していたこともあり，流暢な中国語を話し，台湾のことにも精通していた。日本の企業でしばらく働いていたが，台湾で培った語学力とネットワークを生かそうと，いくらか資金をためると，台湾と日本を行き来し貿易を始めた。一方，妻の黄さんは日本で料理店を営む実家の手伝いをしながら子育てをしていた。1980年代になると，台湾で日本語が流行したため，小川さんは日本語学校を開校した。この頃から，小川さんは，ビジネスの基盤が台湾で，家族は日本という生活形態が定着する。2週間に一度日本にいる家族のもとに戻り，一方，妻の黄さんと子どもたちは，学校が休みになると小川さんがいる台湾に帰るという「遠距離家族生活」をしていた。小川さんにとって，日本は帰るところなので，台湾から家族のいる日本に戻る際は「回日本（huiriben）」といっている。一方，黄さんも，子どもをつれて小川さんに会いに台湾に渡るときは「去台湾（qutaiwan）（台湾に行く）」ではなく帰るという意味を込め「回台湾（huitaiwan）（台湾に帰る）」という。「家があるので当然」なのだそうだ。

国際結婚をした小川さんと黄さんにとって，家族が離れ離れで暮らすことは，寂しいものでもあったが，自分たちのバックグランドが国を跨ぐゆえに仕方ないとも思っていた。子どもたちには，両方の言葉や文化を身につけ国際的に活躍してほしいと思っているため，長期休暇で台湾に帰る度に中国語を学ばせた。また家族が一緒に過ごせるときは海外旅行をすることも多かった。

その影響もあってか，3人の子どもたちは高校や大学になるとそれぞれ自ら留学を希望した。長女は英語と中国語両方を習得できるシンガポールへ，そして長男は高校時代からカナダに留学した。長女と長男がそれぞれ留学していた時期，黄さん一家は5人5箇所で暮らしていたそうだ。次男は黄さんとともに日本で暮らしていたが，パイロットを目指し航空学校で学んでいたため，家を離れ金沢で寄宿生活をしていた。

家族5人4カ国5箇所に散らばっていたため，毎日顔を合わせることこそなかったが，それぞれ国際電話などで頻繁に連絡をとり合っていた。また，「子どもたちは，休みになると，台湾に帰ったり，日本に帰ったりしていた」という。

現在，長女と長男は留学を経て日本の大学で学んでいるが，2人と入れわかって今は次男がカナダに留学している。そして，長男は，大学の交換留学で2007年夏からアメリカに再び留学する予定である。「夏から1年間アメリカに留学した後，今度は中国に留学して中国語もブラッシュアップしたい」と語る。そして「将来は，国際金融の仕事に就きたい」という目標を持つ。一方，長女に家族のことを尋ねると，「小さい頃は，父が家を留守にすることが多く寂しいと思うこともあったけど，自分も留学を経験して感じたのは，家族はどこかで繋がっているということ。そして，家族それぞれが自分のしたいことをしているので，こういう家族形態もいいのではないかと思う。むしろ，どこにでも帰れる家があっていい面もある」という。そして，「自分は，シングルカルチャー（ひとつの文化）のなかで育っていないので，言葉や文化などを

複数身につけ，それを生かして国際的な舞台で活躍したいと思う」と語った。実際，英語，日本語，中国語を習得した彼女は，大学で学びながらイギリスのファッション雑誌社の東京支社でインターンとして研修を受けており，大学卒業後は，ファッション関連の仕事に就き，世界各地で取材する将来像を描いている。彼らの世代で特徴的なのは，日本や中国などエスニックな繋りにしばられることなく，よりグローバルな舞台でトランスナショナルな活動をすることを目指していることである。

小川さんは，台湾の会社と日本を行き来するだけではなく，近年は中国で製品開発を行っているため，中国にも頻繁に行くようになった。黄さん一家のディアスポリックな家族形態は，ますます拡散していきそうだ。

3.2. 契約社員からトランスナショナルな企業家へ

日本で貿易会社を経営する華僑 2 世である徐氏[4] は「帰化の申請をしようと思って計算してみたら，1 年のうち，200 日は日本にいなかった」という。

徐氏は，中国本土出身の両親のもと，1950 年代に台湾で生まれた。4 歳のときに両親とともに来日。日本の中学，高校を卒業した後，「僑生（qiaosheng）」（帰国生）として台湾の大学に進学した。中国語は家で話していたし，小学時代は台湾で過ごしていたため，言葉の問題はなかったが，中国語による高等教育はこのときが始めてだったうえ，大学での授業内容が難しかったので必死に頑張った。難関の受験戦争を勝ち抜いてきた「本地生（bendisheng）（現地出身の学生）」と仲良くなりノートを借りたり，勉強を教えてもらったりした。彼は「いくら勉強しても理解できない科目もあった。そのかわり，カンニングの腕は誰にも負けなかったね」と大学時代を振り返る。

勉強ではとうてい「本地生」にかなうはずがなかったが，部活ではバスケット部のキャプテンを務めた。マージャンの腕のほうでも名が通っていた。ノート借りや単位のとりやすい授業の情報集めをしていたおかげで，大学内での人的ネットワークは人一倍強かった。そのため，徐氏が主催するダンスパーティーなどのイベントは人がたくさん集まり人気も高かった。「卒業単位取得には苦労したし留年もしたが，楽しい大学生活だった」そうだ。

1980 年代初め，台湾での大学生活を終え日本に戻った。日本はバブル経済の真只中だ。当時の日本の大手企業は，4 月に一斉に新入社員を入れるという制度が定着しており，6 月に卒業して日本に戻ってきた徐氏はタイミングを逃していた。しかも，履歴書を送っても名前や本籍の欄から外国人であることが一目瞭然である徐氏は，日本の大手企業への就職はそう容易ではなかった。「日本に暮らし，日本で育ったが，日本にいるときは，中国人であり日本人とは違うのだという意識は当然ある」という。「就職で違う扱いを受けても仕方がないと思った」。

なかなか就職も決まらないまま実家の貿易会社を手伝っていると，知り合いのつて

で，車のパーツを製造している某大手企業への就職の話が舞い込んできた。その会社は中国マーケットへの進出を計画しており，中国語のできる人材を探していた。面接で即採用が決まったが「契約社員」としてであった。

徐氏は，中国進出のプロジェクトを担当し，通訳などのため中国へ出張することが増えた。両親は中国大陸出身とはいえ，中国の共産化により故郷を後にしてから一度も中国へは戻っておらず，家族の中で彼が最初に故郷を訪れることになった。徐は台湾出身であり，家族は台湾政府が発行する中華民国パスポートを持っていた。中国へ渡航するためには，特別の渡航証明とビザを取得する必要があった。

中国において，徐氏は中国語に長け中国名であるので同じ中国人として親近感を持たれるが，やはり「海外から来た人」として，さまざまな面で違う待遇を受けた。彼が中国に行き始めた1980年頃は，旅費やホテル代，そして貨幣にいたるまで国内の人と海外から来た人で区別がなされ二重構造であった。彼自身も，「中国本土の人が考えていることは理解できるが，やはり海外での生活が長い自分とは違うと思う」という。彼にとって，日本と中国，どちらも身近であり理解することはできるが，それとは裏腹に，どちらも完全な居場所ではないという思いがあるのも否めない事実であった。

当時，経済が自由化したばかりの中国と日本の間では，言葉はおろかビジネス習慣などさまざまな面で違いがあり，相互理解のためには双方の文化習慣や価値観念を熟知する人による橋渡しが欠かせなかった。日本で育った華僑である徐氏は会社にとってはうってつけの存在だった。頻繁に中国へ出張することになった徐は，出張がきっかけであったが，長年連絡を取れずにいた親戚に会うこともでき，また度を重ねるごとに友人や知り合いも増えていった。

数年が過ぎると，中国の友人から新しくビジネスをしないかという誘いがあった。日本の会社のサラリーマン，しかも契約社員として働き続けることに少なからず不満と不安を感じていた徐氏は，再三悩んだ末その誘いを受けることにした。ビジネス内容は，電子機器のパーツを中国重慶に輸出するというものであった。オフィスもないまま，家の電話とファックスを使ってのスタート。「中国大陸の人とのビジネスは，どうしても会って食事したりお酒を飲んだりして交流を深め，信用を築き上げないといけない」。そのため徐氏は，中国と日本を頻繁に行き来し，月の半分は中国でホテル住まいをする生活を送るようになった。

ビジネスが軌道に乗ると，オフィスを構え従業員を雇うようになったが，商談はどうしても自ら中国の顧客のところに出向かねばならなかった。また，ビジネスで中国と日本を行き来する途中，フライト経路の関係もあり台湾や香港を経由することが多かった。大学時代の友人や親戚に会ったり，所属していた社会団体の活動に参加するなどの目的もあった。頻繁にアジアを飛び回ることによって，彼の人的ネットワーク

は自然に広がり，それによってビジネスチャンスが舞い込んでくることは多かった。例えば，台湾で参加していた団体で知り合った人とのネットワークがきっかけで，徐氏は台湾の化粧品ブランドの日本代理店を引き受けることになった。

一方，もともと手がけていた電子機器のパーツの輸出の事業に関しては，中国の急速な経済成長にともない注文量が増え，日本からの輸出だけでは間に合わなくなり，結局，徐は中国に工場を建設することとなった。日本から技術者を送りこみ，中国でも生産を行い需要にこたえている。ビジネスが拡大した現在では，日本と重慶，双方に家を持ち，また台湾出身の女性と結婚したため，台湾にも家を持つようになった。

自分の居場所が日本なのか，台湾なのか，そして中国なのか，いつも中途半端に感じていたが，むしろ彼のそんなディアスポラな文化背景が，いつしか日本，中国，台湾どれもが彼の拠点，そして家がある場所となり，今のトランスナショナルなビジネスにも繋がっている。

4. おわりに

華僑・華人たちの動きはかつて，移住元から移住先への単線的で，一方向的な越境が主であったが，近年の越境形態は複雑化しており，場合によっては最終目的地がどこになるのかがわからないまま漂泊している感すらある。

特に2世3世の華僑・華人たちは，生まれ育った地においても，ルーツがあるとされる中国においてもマイノリティとしての立場を余儀なくされ，「一体自分は何者なのか？」「Where is Home？ 何処是吾家（hechushiwujia）」と自分に問いかけている。そのため，より心が落ち着くところ，より自分の能力やバックグランドが生かせるところを求めて，国境を越えて移動している。そんな華僑・華人たちの間で，あらたな家族形態や活動空間が形成されている。根無し草のように漂泊しているように見られるが，なかには行った先々で見出した多文化を有する自己の存在価値，漂泊している間に築いた人的ネットワークや情報をもとにトランスナショナルな活動を行い，あちこちにネットワークをはりめぐらせ，「Home everywhere 処々都有家（chuchudouyoujia）」と，どこにでも帰る場所を持つようになっている。もちろん，華僑・華人のすべてがこのような成功体験を有しているわけではないが，複数の拠点を有している華僑・華人は少なくない。

こうした漂泊する華僑・華人たちは，いくつかの利点と欠点を有している。利点としては，複数の地を往来するため，それぞれの地の情報を入手しやすいこと。また，それぞれの地の特徴や欠点などを知り，ビジネスにつなげるアイディアとチャンスを多く有していること。移動が多いため，各地に順応する柔軟性が身につき，その結果，人的ネットワークを広げやすい性であること。国家から比較的自由な立場にあり，政治経済の変動にいちはやく対応できることなどである。欠点としては，浮遊したイ

メージがあり，帰属がはっきりしないこと。移動の頻繁化にともなう時間的・経済的コスト，そして家族の精神的な負担などが挙げられよう。

また，彼らと国家の関係も興味深い。漂泊する華僑・華人たちのアイデンティティが拠り所とするのは，国家や民族，コミュニティよりも，むしろ家族や仕事などより個人的なものになっている。国境の存在に対する意識もきわめて低く，グローバル化や技術の発展も拍車をかけ，彼らは頻繁に越境するようになっているのが特徴である。そんな彼らは，「Where is Home？　何処是吾家」と自問よりも，むしろ近年は「Home everywhere　処々都有家」を実践している。筆者が，華僑・華人を「落葉帰根(luoyeguigen)から落地生根(luodishenggen)へ」と表すよりも，むしろ「漂泊尋根(piaobuoxungen)から処々扎根(chuchuzhagen)へ」と表すほうが適切であると主張するのも，そのためである。

注

1) 世界の華僑・華人人口を正確に把握することは困難である。なお，『華僑経済年鑑　1999年版』（台北：僑務委員会），2000年の統計によると，3,487万人となっている。
2) 1998年12月，ハーバード大学燕京研究所において開催された「Chinese Diaspora」と題するシンポジウムおいて，研究者，在米華僑・華人などを中心に，活発な議論が交わされた。
3) 2006年10–12月，黄さん（仮名）の家族にそれぞれ数回にわたりインタビュー，横浜にて。
4) 2006年8–9月，徐さん（仮名）に数回にわたりインタビュー。

文　献

戴国煇
　1980　『華僑――「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版。
　1991　『もっと知りたい華僑』弘文堂。
中華会館編
　2000　『落地生根――神戸華僑と神阪中華会館の百年』研文出版。
饒尚東
　1995　『落地生根――海外華人問題研究文集』砂羅越華族文化協会叢書。
僑務委員会編
　2000　『華僑経済年鑑1999年版』台北：僑務委員会。
陳国賁
　1999　「失根・尋根・重根」『明報月刊』1999年9月号　16–19頁。
陳天璽
　2002　「台湾系華人移民」『アジア遊学――特集　移民のエスニシティと活力』No. 39　19–35頁　勉誠出版。
　2001　『華人ディアスポラ』明石書店。
樋泉克夫
　2006　『華僑烈々――大中華圏を動かす覇者たち』新潮社。

Chan Kwok Bun
2000 *Chinese Business Networks: State, Economy and Culture*. Singapore: Prentice Hall.
Hamilton, Gary
1999 *Cosmopolitan Capitalists: Hong Kong and the Chinese Diaspora at the End of the 20th Century*. Seattle: University of Washingtong Press.
Ong, Aihwa
1999 *Flexible Citizenship: the Cultural Logics of Transnationality*. London: Duke University Press.
Toynbee, Arnold
1961 *A Study of History*, 12 vol. London: Oxford University Press.
Wang, Larry
1998 *New Gold Mountain*. New York: Mass Market Paperback.
Wang Ling-chi and Wang Gungwu
1996 *The Chinese Diaspora*. Singapora: Time Academic Press.